

## ホルミシンス大論争

# 反ホルミシンス派の 反核イデオロギ―

渡部昇一

上智大学名誉教授



### 一、遺伝と肥料

「週刊文春二〇一一年十一月二十九日号に『放射能汚染 福島で不気味な植物巨大化進行中』という記事が載った。記事にある、原発事故後に異常に生育した植物と放射能の因果関係については今後の研究が必要なところであるが、これがホルミシンス信者の手にかかれれば、一気に『放射線が生物の生育に必須である証明だ!』ということになってしまうのである。

ちょっと冷静に考えてもらいたい。本当に植物の異常生育が放射能によるものだとすれば、それは言葉を変えれば『放射線の影響で奇形ができる』と認めていることに他ならない(小林よしのり『放射能は体について』説を噴<sup>ぶ</sup>う)本誌五月号) この程度のことを言う人が、放射能の問題にゴーマンな態度で発言しているのだから怖ろしい。私自身のやっているちょっと変なことを紹介してみよう。

毎年、下谷の朝顔市で買った朝顔

の鉢をもらう。朝顔はしばらく毎朝咲いたあと、花は小さくなったり、咲くのをやめたりする。その時、私は用意してあるコップに自分の小便を少し入れ、それを水で割って、つまり希釈して朝顔にやる。すると、再び元気になって花をつける。そのうちまた元気がなくなる。その時はまた少し濃く希釈した小便水を与える。再び元気になる。そんなことを三、四度繰り返すのである。

元気がなくなり、小さな花を少ししかつげなくなった朝顔が元気にな

## ●ホルミシス大論争



誤った知識による放射能の回避がもたらす害は多大だ

(写真提供 / 大館市役所=時事)

って再び大きな花をつけた時、それを「放射線の影響で奇形ができた」という人はいないであろう。それは、尿に含まれている物質が有効な肥料の役、つまり朝顔を励ます刺激作用になったのだと考えるのがふつうである。というのは、奇形に関係ある

のは染色体（DNA）に何らかの変異が生じたからであることは、遺伝を語る場合の常識以前の常識である。

福島で枯れかかったサボテンが元気になり、バラが平年の二倍も花をつけ、リンゴが大きく甘くなったとしても、それは奇形の話ではなく、肥料的な刺激活性化の効果である。梨の実が大きくおいしくなったというような現象を遺伝に結び付けたのならば、その梨の実に放射線をかけて、そこから生じた梨の木について論ずるのが順序だ。

事実、約二十五年前にシカゴのアーゴン研究所（the Argonne National Laboratory）の地下室にある二十一センチの厚さの鋼鉄で囲まれ、四トンもあるドアのついた研究室で、電離放射線（ionizing radiation）と生物の関係の実験が行われた。

その結果は、放射線の欠乏状態における実験生物は、ビタミンや酸

素の欠乏と同じような悪影響を受けることが分かったのである。この場合の放射線は遺伝子に関係したものでなく、酸素やビタミンと並べられるべき刺激である。つまり一種の肥料効果なのである。

簡単に言えば、小林よしのり氏は、遺伝子に関係ある奇形と、小便による肥料効果の科学的な意味の区別もつかずに、大きな口をたたいて「嗤った」という恥を天下に示しただけの話なのだ。こんなセリフを小林氏に言わせたプロンプターは誰か知りたいものだ。

### 二、二十世紀最大の科学的スキャンダル

このような無知は普通なら笑殺、あるいは憫笑（びんせう）して見過ごしておけばよい話である。しかし、福島の原因問題が絡むとそうもいかない。というの、こういうこともあるからだ。

しばらく前、小石原昭氏と会食する機会があった。小石原氏は戦後間もなく若くして『知性』の編集長となり、今日に至るまで出版界で現役で活躍しているドン的な人物である。この小石原氏が次のような主旨の話をしてくれた。

「とても美人で有能な女性編集者がいた。この人は八十何歳かで亡くなったが、終生独身であった。思いを寄せる男たちもあつたろうが結婚はしなかった。その理由は、広島の原因爆被災者だったからです。いつ白血病などの悪性の病気が起こるかもしれないという不安や、子供を産んでも奇形児になるのを怖れていたからではないか」

このような人、特に若い婦人たちは広島や長崎にもほかにも少なからずいたと思う。この人たちに結婚を断念させた知識こそ、小林よしのり氏が支持するLNT仮説なのであ

る。LNT仮説とは、昭和二年にマラーがシヨウジョウバエにX光線を照射して得た実験結果を人間にも及ぼした暴論なのである。

マラーの時代はDNAの研究は進んでおらず、DNAが持つ修復酵素についても知られていなかった。自然放射線や活性酸素によって、一つの細胞は一日百万回ぐらい傷つけられる。つまり、傷つけられ続けている。しかし、修復酵素はそれを修復し続けている。それどころか、低線量の放射線はその修復酵素を活性化する……というようなことは、マラーは知らなかったし、それは彼の罪ではない。

だから、マラーはシヨウジョウバエの場合、低線量の放射線でも染色体（マラーはまだDNAを知らない）に影響があることを突き止めた。ところが、シヨウジョウバエの精子は例外的に、修復酵素を欠いていたの

である。

このマラーのシヨウジョウバエの実験に基づいて、ICRP（国際放射線防護委員会）はLNT仮説を採用しているのである。これは放射線量と健康被害は直線的に比例し、低線量でも有害だという悪魔的な仮説なのである。

つまり、シヨウジョウバエと人間とを区別していない仮説なのである。放射線が問題になるとシーベルトという単位がよく出るようになった。

シーベルトは放射線の学者の名前であるが、このシーベルトと一緒に研究したワリンダー博士は「LNT仮説は二十世紀最大の科学的スキヤンダルである」という本を書き、二十年以上もラドンと肺がんの関係に取り組んだピッツバーグ大学のコーエン博士も、「LNT仮説を直ちに阻止すべき」という論文を書いているという

## ●ホルミシス大論争

し、元国連科学委員長ヤオロースキ博士も、同じ趣旨の論文を書いている(服部禎男『放射能は怖い』のウソ)、武田ランダムハウスジャパン、二〇一一年)。

### 三、放射能問題は「量」なのだ

小林よしのり氏は、マラーの説が哺乳類にも適用できるという実験を紹介している。それは一九五〇年代末にアメリカ、オークリッヅ国立研究所のラッセル博士が、百万匹ものマウスに放射線を当てる「メガマウス」実験を行い、さらに日本の放射線医学総合研究所の戸張巖夫博士らは、人により近いカニクイザルを使って研究を行い、いずれもマラーの実験を否定するような結果は得られていないという。いかにも説得力がありそうな話だ。

しかし、放射線の問題は「量」なの

だ。放射線に限らず、塩でも日光でも火でも、大量なら死に至る。醤油飲みの競争の危険については述べたことであるが、健康に良いとされる日光浴でも、アラビアの砂漠で真っ昼間に裸でやったらどうなるか。問題は「量」なのである。

ラッセル博士の実験も戸張博士の実験も、高線量の放射線実験であったそうだ。人間や哺乳類の健康を問題にするときは、線量率を考慮するのが肝心なのだ。一定時間に何ミリシーベルトの放射線を当てたかである。その率が高ければ、必ず悪影響が出る。高い日光照射率のところでの日光浴(たとえばアラビア砂漠の真っ昼間)や、短期間に大量の塩分摂取(醤油飲み競争)などと、放射線についても同様である。

ところが小林よしのり氏は、細胞に修復機能があることを認めながら、ドイツ・ザールランド大学のロ

ートガム博士とロブリッチ教授が、低線量被曝でもDNAの二本鎖切断が起こることを実証したことを挙げている。

問題は、切断されても修復されることであり、修復されないものはアポトーシスで除去されるのである。

この学者の研究は一・三ミリシーベルト(照射時間が示されていないので線量率不明)以上のものである。これについて小林よしのり氏はこう

いう。

「一・三ミリシーベルト以下についても、この比例直線どおりに二本切断が起こるであろうことはまず間違いない」

シヨウジョウバエ信者の典型的な発言であることに、小林氏は気付いていない。それを権威ある細胞学者の如くゴーマンかましている。問題は低い線量率のことが、全然わかっていないのではないか。前にも挙げ

た例であるが、繰り返す。ある植物と温度の関係を調べる実験で、室温九〇℃で枯れた、七〇℃でも枯れた、三〇℃でも枯れはじめた……と言いつつ、「それ以下でも枯れるに違いない」と主張したら誰でも嗤うだろう。二〇℃でよい実や花をつけるだろうと、誰でも知っているからだ。

放射線だと特異なものと思われて、そうした判断力を停止する人が多いように思われる。小林よしのり氏は、米科学アカデミー委員会がLNT仮説を支持したと書いてある。こういうことは私も情報として持つていないので専門家に問い合わせたところ、この時のレポートは細胞実験の事実が入られていないのだそうである。

いずれにせよ、小林よしのり氏、あるいは彼のプロンプターは放射線

の問題における線量率、つまり「量」の問題に鈍感である。小林氏はREF（放射線影響研究所）の二〇一年の発表のなかで、「原爆被害者の平均余命は、被曝者の増加に伴い、一グレイ（γ線の場合には一シーベルト、中性子線は五〜二十シーベルト）あたり、一・三年短縮する」という報告を引用し、「被曝で寿命は縮みこそすれ、伸びるということはないのだ」と断言している。

しかし、ここに引用されている放射線の単位を見たまえ。シーベルトである。一シーベルトは千ミリシーベルト、百万マイクロシーベルトだ。中性子線二十シーベルトというのは、二千万マイクロシーベルトである。

線量率が示されていない、つまり被曝の時間が示されていないが、ホルミシス学会の医者たちのいう低線量でないことはたしかである。

小林よしのり氏の放射線の「量」に関する鈍感さを示す目覚ましい例をもう一つ挙げてみよう。

「一九二〇年代から三十年代初頭のアメリカでも『放射線は体にいい』という信仰があり、葉からキャンディまで、ラジウムを混入した商品が大人気になったことがある。

なかでも、ラジウム226とラジウム228を主成分とする放射性水溶液が「ラジトール」の商品名で「百六十種類の病気に効く副作用なしの飲み薬」として発売され、広く飲用された。……ちなみに『ラジトール』の広告塔として四年間に一千本から一千五百本を飲んだ億万長者、エベン・バイヤースはやがて体重が四十キロまで痩せ、手術で顎の骨と頭蓋骨の一部を切除するという重病（おそらく骨ガン）の末、非業の死を遂げた」面白例である。いかに多量が体に悪いかの証明だ。小林氏がこんな

## ●ホルミシス大論争

話を誰から聞いたか知らないが、かつてはインボの男たちがラジトールなど飲用した時代があったのだ。ラジウムの粉を飲んだ者もあったという。

いまではバイアグラであるが、バイアグラを毎日何百錠も飲んだらどうなるだろうか。つまりは、この話はアラビア砂漠の日光浴や醤油飲み競争と同質の話で、つまり、小林よしのり氏は「量」と「質」の関係が把握できないままにゴーマンかましていくだけなのである。

「量」と「質」との関係のみならず、小林よしのり氏は、百分率そのものもわかっていないのではないか。小林氏は「もし人口百万人の都市でがん死亡率が1%上がったら、死ななくて済んだはずの人が一万人死ぬという」ことであり、大事件である」と言っている。

なるほど、人口百万人のガン死亡

者が1%なら一万人がんで死ぬことになる。しかし、がん死亡率が1%上がるということは、この場合、1%だった死亡率が1・01%になるということだ。つまり、人口百万人の都市でガンで一万百人死ぬということである。百分率もわからない頭で議論されてはたまらない。

### 四、原爆被災者の健康を嫌がる人々

高線量の放射線被曝を受けながら元気な人を私は二人身近に知っているし、そのほか少し遠い関係でも知っている人が少なくとも一人いる。

そんな身近な体験から、放射線の被害について「はてな」と数十年間、私は思い続けていた。たまたま、福島原発事故をきっかけにホルミシス医学を知り、その後の広島・長崎の調査事実も知って、ホルミシス医学にいい分があるらしいと考えるに

至った。この主旨の私の著述に対して、小林よしのり氏はこういう。

「ホルミシス老人のなかには、『広島・長崎の被爆者は元気で長生きしているではないか』という暴言まで平気で言い出す者までいる。

しかもその根拠が、原爆慰霊祭に老齢の被爆者が参列していたとか、たまたま自分の同窓生にそういう人がいるとかいうことだけで、もう『データ』でも何でもない。全く話にもならない」

これは、話の筋道が逆になった批判であって、小林氏が文章の論理を追うことができない頭脳なのか、筋道を通して考える気がないかのいずれかである。

ひどい被曝を受けたはずなのに、元気な人たちを身近に見て、放射線の恐ろしさを永井隆博士の本で知っていた私は「はてな」と不思議に思っていたのである。私が自分の身近な

例をデータにしてホルミシス理論を唱えたわけではない。私はホルミシス理論を読み、さらに広島などの最後のデータを読んで、はじめて自分が「はてな」と思っていた疑問に納得がいったということなのである。

この順序を逆にしてゴーマンかましている小林氏は、頭が悪いか、悪意に満ちていたかどちらかである。

こんな私的なことに対する批判はどうでもいいことだが、広島・長崎の原爆のその後の調査に関する小林よしのり氏の発言は見逃しがたい。原爆の直撃を受けた人たちの被害の大きいことには誰も異論を唱えていない。またその時に即死、あるいは間もなく死亡した人たち以外の生存者でも、何万単位のマイクロシーベルト以上になるような被曝者の場合は寿命にマイナスに働くことにも誰も異論を唱えない(同じ比喩を重ねて述べるので恐縮だが、ハウス栽培で

室温を五〇℃以上にしたら枯れはじめたというようなものだ)。

しかし、広島・長崎の被曝者についてジェイムズ・V・ニールのような世界的にその権威を認められている遺伝学者が、日本に来て四十年にもわたって被曝した女性の子供を調べたが、出産した子供たちに奇形は一人も確認できなかったというような事実はもっと広く知られるべきであろう。

奇形や異常を確認できなかったのも、染色体や遺伝子の詳細な検査もなされたのである。その結論は、被曝者の染色体やDNAに異常が見つからなかっただけでなく、被曝しなかった人よりもむしろDNA異常の率は低かったのである。

### 惨状のみを煽る勢力

これに対して、小林よしのり氏はこう言う。

「しかし、原爆被曝者のデータは『聞き取り調査』による。『奇形』のようなデリケートな問題には大抵の親は口を閉ざすであろうから、正確なデータを望むのは難しいだろう」

ニールらの研究は、単なる「聞き取り調査」などではない。被曝者の染色体・DNA検査まで含めての結果なのである。被曝と同時に、あるいはその間もなく亡くなられた人たちは別として、生き残って広島や長崎に生活している人たちの間に奇形が増えたというデータでも噂でも、小林よしのり氏が持っているなら、ぜひ教えてもらいたいものだ。

「広島・長崎で被曝した女性からは奇形が生まれる」という風評被害者の一例として、私は最近、小石原昭氏に聞いた話を紹介した。普通の日本人なら、広島・長崎の被曝者から生まれた奇形児も報告されていないし、被曝者たちはむしろ健康になっ

## ●ホルミシス大論争

ているという記事を読めば嬉しく思うはずだ。

しかし、それを喜ばない日本人もいるのだ。それは、広島などで原爆反対運動（しかし、ソ連や中国の原爆には反対しなかった）をやっていた関係者たちである。被曝者がその後、健康だったり奇形児が出てこなかったりしては、彼らの運動には困るのだろう。

ニールなどの調査結果は、明らかにホルミシス理論を裏づけているが——ニールがホルミシスを唱えているとは聞いたことがないが——こういう日本人には嬉しい話が、ずっと広まらないままだったという事実こそ怖ろしい。

日本には原爆の被曝の惨状のみを煽り続けてきている勢力があり、その勢力は今日の脱原発を煽り立てているのである。小林よしのり氏は、その人たちと連なっていると考えて

よいだろう。

小林氏が知ったかぶりでデータを振り回してゴーマンかましているが、そのデータは誰かにもらったものであるに違いない。その「誰か」は、ホルミシス現象が敵であるように感じられる人である。

広島・長崎の調査データは、明らかに人間はシヨウジョウバエと違って示している。小林よしのり氏も担いでいるLNT仮説は、シヨウジョウバエから出ているのだ。それに基づいたLNT仮説の利権に関係したり軽信してしまった学者たちにも、広島・長崎で元氣な被曝者の存在は嬉しくないのだろう。

広島・長崎では除染作業は行われなかった。それに反し、広島・長崎とは比較にならない線量の福島では除染をやり、強力な放水で植物をかえって枯らしたりしている。LNT迷信の悲劇——喜劇的にも見える

である。

### 五、NASAについての無知

小林よしのり氏はまた、こうも言う。

「ところが、当のNASAはホルミシス説など一切採用せず、宇宙飛行士の放射線被曝に関しては、最初に宇宙に行った年齢や性別によつて厳しく管理するルールを設けているのだから、『NASAで研究した』と称するラッキー博士の経歴自体が眉唾ものと言っしかない」

と、NASAのことを知っているような口ぶりであるが、宇宙飛行士の身体検査について、小林氏は初歩的な常識を欠いていることを指摘すれば足りるのであろう。

まず、宇宙飛行士は極めて健康な人たちが選ばれる。厳しい訓練や身体状況の確認のあとに、宇宙に出

る。帰ってからも嚴重にリハビリを受け、身体状況の検査がある。この検査で異常がなければ、NASAはそれでよい。

非常に分かりやすい例を一つ上げる。前立腺PSAの正常数値は0から4までとされている。出発前の宇宙飛行士のPSAが2だったとすれば、正常である。帰還したあとには1、あるいは0になっていたとしても正常である。どっちも正常なのだから、NASA当局としてその点については関心を持たないのが当然である。

ところが、ラッキーというNASA飛行士の食物に關与していた生化学者は、宇宙からの帰還者の数値が正常値のなかでもより望ましい数値のほうに有意に変化していることに気づいた。たとえばの話で、PSAは2から1、あるいは0に、RBCは五百五十から五百に、WBCは九十

から五十二、といった具合である。

どっちの数字も正常値範囲だが、あとのほうがどちらかと言えればより望ましい。これが多くの主要数値に見られた時に、生化学者のラッキー博士は、宇宙における高い放射線量がむしろ健康に良いのではないかと考えたのである。

これは、実験室における彼の他の動植物の実験とも平仄が合う。こういう観察がホルミシス理論に連なるのである。一方、NASAはそれに関与しないし、する必要もない。NASAがわざわざホルミシス説に触れるとすれば、そのほうが不自然で無用の話だ。

それを小林よしのり氏は、「当のNASAはホルミシスなど一切採用せず」などと噴飯ふんぱんものことを言う。そして「ラッキー博士の経歴自体が眉唾」などと発言を暴走させている。

小林氏にこんなNASAの話を吹

き込んだ人は誰だろう。罪なことをしたものだ。もしこの記事が英訳されてラッキーの目に入れば、名誉棄損で訴えられる可能性が高いのに。

## 六、ラッキーとバラケルス

ホルミシスについては、ラッキー博士の名を除いては論じられない。以下は私自身が英語の資料で読んだものから、面白そうなところを拾って紹介してみたい。英文で公刊されているものだから、不正確や脱落はあっても、ウソはないと考えてよいだろう。

ラッキーの父は、医者でもあり牧場主でもあった。アメリカで「ranch」(牧場)をもっていた。ブッシュ前大統領のラウンチに招かれるのが一つの名誉であったように、ラウンチを持つというのはアメリカでは一つの社会的ステータスになっていると考え

## ●ホルミシス大論争

てよいだろう。

ラッキー家のラーンチは二十平方マイル、つまり約三十二平方キロメートルということになる。牛五百頭、馬百五十頭、羊二千頭ぐらいの規模だった。このラーンチで、ラッキー少年はガラガラ蛇を捕まえて毒をしばらくとったり、乾燥した毒を集めるのを楽しみにして育った。

のちに父のラーンチは破産したが、ラッキーはウイスコンシン大学で生化学・栄養学に関する論文で修士および博士の学位を取得した。その前に彼はワイオミングの大学に在学中に予備士官訓練コース（ROTC）を修了して予備少尉になっていたが、第二次世界大戦中は博士論文のテーマが「戦争に欠くべからざる研究」との判断で招集免除になった。彼の研究は、アメリカ陸軍の携帯口糧にとって重要と認められるのである。

その後の経歴では、ミズーリ大学医学部生化学部の教授になり、三十五年勤続し、そのうち十四年間は学部長であり、六十五歳で退職した。

ミズーリ州とかミシガン州とかインディアナ州とか中西部の主要大学は、東部の私立大学と対照的に、州立の大きな大学が重要な地位を占めている。その大学で学部長を十数年務めたという経歴は立派なものである。小林よしのり氏がこういう学者を指して、「経歴自体が眉唾ものというしかない」という資格があるのか、胸に手を当てて考えてみたらいいだろう。

### 少量の毒物は良い刺激

ラッキー博士の研究グループは、ビタミン10と11を確定した。ある種のビタミンBが腸内細菌の働きで合成されるといことは推定されてい

たが、その腸内細菌をなくしてみたらどのような発育障害がその実験動物に起こるかを調べるために、抗生物質を餌に加えたのである。

ところが、予想に反してB欠乏が起ころどころか、動物の成長を促進することが分かった。彼は、少量の抗生物質が家畜の成長を促進する現象をホルモリゴシス (hormoligosis) と名付けた。この単語の語源は、ギリシャ語のホルモ（私は刺激する）とオリゴ（少量）をくつつけたもので、名詮自性、「少量の毒物は〔良い〕刺激を起こす」という意味である。これはホルモリガントとも呼ばれている。

いずれにせよ、腸内のビタミン合成をする有用なバクテリアを殺す抗生物質（つまり一種の毒）を与えるとか家畜の成長が早まるという期待に反した結果は、ラッキーの頭に深刻



## ●ホルミシス大論争

きた反原発運動者たちの系統は見えて見えてである。だが、核が絡んだ問題なので、善意の人々、特に妊娠・出産に関係のある女性たちが、反核イデオログに煽られてしまっているのだ。

常識的に考えれば、一人の死者も出さず、一人の放射線障害者も出ていないこの事故に、こんなに長期に騒ぎ続けることがおかしいのである。大雪が降れば百人も死に、台風が来れば何十人も死ぬ。しかも、「コングリートから人へ」などのスローガンで防災がゆるんだ犠牲者の数は福島島の事故とは比較にならない。福島島の放射線のほうはゼロだからだ。福島島の死者や被害者は、すべて政府命令による強制移住のためである。

そこで、何で福島の問題が長引くかと言えば、政府が東京電力という日本の中心産業社会を国営にしたいからだという憶測も出てくるのである。

。考えてみれば、菅直人氏も枝野幸男氏も極左運動の関係者であった。当時のことは忘れられていることが多いが、われわれは左翼運動のスローガンが「産学協同反対」であったことを忘れてはなるまい。

「産学協同反対」ということは、大学の研究——特に工学部・理学部の研究と産業界を結び付けてはならぬという運動だったのだ。大学と産業界が協力し合えば、社会が豊かになる。それはとりもなおさず、資本主義社会の延命になる。だから産業界に大学は協力してはならぬ。日本は豊かになってはいけないというのが、彼らの主張だった。

その左翼もソ連が瓦解したり、毛沢東主義が中国で捨てられてからはおとなしくなり、環境問題などの市民運動という狐の皮を被<sup>かぶ</sup>っていた。ところが、自民党のだらしなさに乗じて政権についた。政権についてみ

ると、火力発電は環境の敵であることが分かり、CO<sub>2</sub>削減に最も効果的な原発を総電力の五〇%にする、と民主党政権は言ったのである。

ところが、一人も死なない福島原発の問題が起こると、たちまち本卦<sup>ほんけ</sup>還<sup>かえ</sup>りして、菅氏や枝野氏たちは脱原発、基幹産業国有化、資本主義社会貧困化、産学協同反対の方向に舵を切りはじめたという印象を受ける。

### 亡国へ導く反原発

東電国有化が手はじめだ。原発を許さなければ日本は石油・天然ガス輸入のため、いまのところ年間三兆円もの余計な出費をしなければならぬ。さらに、円安が進んだり天然ガスなどの価格が上がれば、五兆円にも十兆円にもなりかねない。消費税がすべて燃料代として消えるのだ。

これは全く不必要な損なのである。国防費にも匹敵するお金が、全

くムダに使われるのだ。ストレステストはヨーロッパでは運行しながらやっているといるが、日本政府はとにかく原発を止めたいのだ。日本の産業の弱体化や空洞化は、菅氏や枝野氏が青春をかけた目的だったのである。

たとえば、枝野経産相も極左「革マル派」との関係は公知のことだ。その「革マル派」の機関誌はすべての原発の停止を呼びかけている。枝野経産相の動きと歩調が合っているというのは私の僻目<sup>ひがめ</sup>だろうか。

たとえば、福島では警戒区域が設置される十日も前に、東電に十兆円近い損害賠償を支払わせることを決めている。政府に大企業潰しの発想がまずあったと思わざるをえない。小林氏がこの左翼政権の手先になることはやめてもらいたいと願うばかりだ。

最後に、ホルミシスについて一言。小林氏は「それでもホルミシスを信じる方々は、子供や孫の部屋に放射能彫刻を置いて、どうぞ健康増進させてやってはいかがだろう」と問いかけている。

私は一立方メートル五万ベクレルのラドン部屋を設けて、週に二、三度入っているし、息子どもも家内も入っている。それに、一リットル五百ベクレルのラドン水を飲んでいく。茶碗一杯では、その十分の一くらいのベクレルになるだろう。健康に良いとは言わないまでも、悪くないことはたしかだ。今年には花粉症もなかった(今年のスギ花粉量は少なかつたそうだが)。

日本でも有名な玉川温泉などは、予約が取れないくらい客が多いと聞いている。昔からの温泉が有害であれば、湯治客が押し掛け続けること

## 7月講演会のお知らせ

講師	石川一洋 <small>(NHK解説委員 前モスクワ支局長)</small>
演題	「ユーラシアについての所感」
日時	7月27日(金)18時
会場	かながわ県民サポートセンター 304号会議室
会費	1,000円(要予約)

主催・問い合わせ  
自治調査研究会

TEL.045-263-0055

はないだろう。

ザルツブルグの近くの坑道は約二千マイクロシーベルト(時)であるが、ここはオーストリアの健康保険の利用できる放射線治療所になっている。ホルミシス理論そのものだ。

パラケルススも嫉妬する同業者たちには殺されたが、その原理は今世紀に至るまで不滅でありつづけているのだ。